

野菜の味

中央大学文学部3年 加藤 静香

「日本の野菜はどんな味がするの」。スウェーデンの友人の言葉に、はっとした。野菜の味が国によって違うなんて、気に留めたことがなかった。

私は現在、大学の交換留学生として、スウェーデンのリンネ大学に留学をしている。首都ストックホルムと、デンマークのコペンハーゲンの上に位置する大学の周りには、いくつもの湖と白樺の木が広がっている。環境保全に力を入れているこの街の夜空からは、天の川だって見ることができる。

毎朝、湖の周りをジョギングし、地元で摘んだベリーのジュースを飲んでから、大学へ向かう。今日も空気がきれい、そんな毎日が当たり前が続いている。

こちらでは、日本のたくさんの「良いもの」に気が付いた。その一つが「野菜」だ。例えば日本のホウレンソウは、味が濃い。一方スウェーデンでは、地理的にホウレンソウを栽培することが難しい。冷凍野菜も多い。



市場に並ぶ
スウェーデンの野菜

スイカはスペインから、ぶどうはイタリアから。主食のじゃがいもはスウェーデン産であるものの、日本のじゃがいもほど大きくない。

今までの私は、食べ物を「消費」していたと思う。店頭に並ぶ食材が、どのように作られたか、考えたことがなかった。安いもの、早く食べられるもの。これらは「食べる作業」であって、

「食をいただく」という感覚は伴っていない。土地ごとに特産品や、特別な食べ物があるから、異なる文化や味が生まれるのに。

日本には、野菜の質の高さ以外にも誇るべき点がたくさんあると思う。例えば、サービスの質だ。日常で当たり前を使うレストランもスーパーも、細部にまでこだわっている。これは、私が日本以外の国での生活を始めて気が付いたことだ。日本のように全ての分野において「小さな工夫」をしている国は珍しいと思う。

日常は、変わらない毎日が続くことだろう。昨日も今日も、慣れた日々を過ごす。私の日本での日常は、本当に良いものを、いつも手にしていた。自分が今までの日常から離れてからその価値に気付くのでは、遅い。だから私は、「いただきます」と「ごちそうさま」を忘れずに言うようにしている。本当においしくて、安全で、新鮮なものが手に入る日常が、当たり前にならないために。

私は、今日も湖のほとりをジョギングし、ジュースを飲んで、授業に向かうだろう。この日常が当たり前が続く毎日に感謝しながら。



スウェーデン国旗を付けたケーキ
(写真はいずれも筆者撮影)